ジェフリ・チョーサー作
「トゥローイラスとクリセイデ」(翻訳)
(そ の 九)

宮 田 武 志

巻 の 五

巻の五はじまる

①ジョーヴが意図し，怒りに燃えた三人の姉妹②パーシーにその実現を任かすという悲惨極まる運命が近づきつつありましたが，それがため，クリセイデは町を離れなければならかなったのです。そしてトゥローイラスは，③ラケシスが糸を撚り合わさなくなるまで，苦悩のうちに生き永らえなければならないことでしょう。王后ヘキュバの息子トゥローイラスがクリセイデを愛しはじめて以来，高く空に在る金髪の太陽は，その明るい光で三度雪を融かし，西風また三度軟かい緑の葉をもたらしましたが，その朝クリセイデが出立しなければならないということは，トゥローイラスにとって，悲痛極まりのないことでありました。

朝の九時に，④ダイオメッドはクリセイデをギリシャ軍のもとに連れて行く用意をすっかり整えましたが，クリセイデはどうすれば一番いいのが見当もつかないで，悲しさのあまり胸も張り裂けんばかりの思いがするのでした。書物に見えるところでは，全くのところ，これほど悲しみに打ちひしがれた女性，町から離れることをこれほど厭わしく思った女性は一人もいなかったようです。どうしていいのか法のつかないトゥローイラスもまた，全く喜びを失ってしまったかのように，これまでまさに彼の希望と喜びのすべてであった愛人を，今か今かと待ち設けていたのでした。

されどトゥローイラスよ，今やすべての喜びに別れを告げ給え，トゥロイの町で再び彼女に会うことは出来ないのだから！

このように待っている間，実際彼は男らしくその悲しみを隠していましたので，顔色では殆んど全くそれと分り兼ねました。クリセイデが馬に乗って出立すべき門の側をうろうろしながら，彼は数人の人たちと一緒に彼女を待ち構えていましたが，口に出してこそ愚痴をこぼさないものの，悲しみに打ちひしがれて，苦悩のあまり馬に跨がっていることが出来ないくらいでありました。ダイオメッドが馬に打ち跨るや，トゥローイラスは全く苦しみ悶え，怒りのためにからだを震わせながら独り言を洩らすのでした，

「ああ，なぜこんな無茶なみじめなことを甘受しようとするんだろう，ぼくは？ なぜ

事態を拾収しようとしないんだろう？　こんなに絶えず煩悶しているより，今すぐ死んでしまう方がましじゃないだろうか？　あの人が行ってしまわないうちに，どうして今すぐ，誰彼の区別なく，どっさり働かせようとしないのだろう？　なぜ町中の人にひと騒ぎさせないのだろう？　また，どうしてダイオメッドを殺してしまわないのだろう？　なぜ一，二の人の助けを借りて，あの人を奪い返そうとしないのだろう？　どうしてこの事態に甘んじようとするんだろう？　なぜ自分の手で自分の悲しみを癒やそうとしないのだろう？」

けれども，トゥローイラスがそのような乱暴な行動に出ようとしないで，それを差し控[50]える気になった訳はこんなんです，つまり，このような行動に出たという噂が立てば，クリセイデが殺されてしまうかも知れないというような一種の不安が，絶えず彼の心の中にあったからなので，実際彼はそのことをひたすら心配したのでした，さもなければ，前にも申しましたとおり，一も二もなく実行したことでありましょう。

馬に乗る用意ができた時，クリセイデはいとも悲しげに溜息をつきながら，「まあ，悲しいこと！」と叫びましたが，どうでもこうでも行かなければならないので，悲しみに沈[60]みながら静かに馬を進めました。愛人を思い切ろうとした時，彼女がはげしく歎き悲しんだとて何の不思議がありましょうか。トゥローイラスは手に鷹を携え，大勢の騎士を引き連れて，鄭重にも，谷を越えて遠く町の外までクリセイデに附いて馬を進めましたが，更に遠くまで行きたくてたまらなかったに相違ありません。早速立ち去るのが辛かったのですが，どうしても引き返さなければならなかったのでした，引き返すことになっていたの[70]です。丁度その時，ギリシャ軍からアンティーナーが出て来ましたので，人びとは皆喜んで，よく帰って来て下さったと挨拶しました。トゥローイラスの心は重かったのですけれども，泣くことだけは慎もうと懸命に努力しながら，アンティーナーに接吻して愛想よく応対したのでした。かくて，いよいよ別れを告げなければならなくなり，彼は悲しそうにクリセイデを眺めていましたが，言うべきことは言って，真剣な気持でクリセイデの手を[80]握ろうと，彼女の側に近づいて行きました。ああ，クリセイデはいとも切なげに泣き崩れるのでした。トゥローイラスは小声でこっそり，「約束の日を守って，ぼくを死なせないで下さいよ」と言うと同時に，顔色蒼然として馬の向きを変え，ダイオメッドにも自分の従者の誰にもひと言すら口を利かないのでした。

タイデュースの息子であるダイオメッドは，恋の技巧の初歩以上を心得ているかのように，この様子をじっと見守っていましたが，やがてクリセイデの馬の手綱を取りました。一方トゥローイラスはトゥロイに向って踵を返したのでした。トゥロイの人たちが立ち去[90]ったのを見定めるや，クリセイデの手綱を引いていたディオメッドは，こう考えました，

「少しばかり口を利いてみようってわけなんだが，うまくやればまんざら徒労に終ることもあるまい，だって，悪くても道中の退屈凌ぎにはなろうというものだ。おのれの利益を忘るる者は愚者なりってことを耳が蛸になるほど聞かされてるんだ，ぼくは。」

併しこういうことも充分考えました，

「だけど恋を語ったり余り大胆に言い寄ったりするのは確かにとんでもない料簡だ，だって，大体見当がつく人物なんだが，その人物をこの人が心に抱いているとするならば，すぐ忘れてしまうってわけには仲々行くまい。とにかく，なんとか工夫して本心を悟られないようにすることだ。」

自分の為になることならよく心得ているダイオメッドは，このように考えた後，あれこれと話しはじめ，彼女が浮かぬ顔をしている訳を尋ねて，自分が何らかの方法で気分を晴らして上げることが出来るのなら言い付けていただきたい，喜んでそうするからと言いました。自分に出来ることでお気に召すようなことがあるなら，お心を和げるために，どんなことでも骨身を惜しまず全力を尽くしてやってみよう，と騎士らしく誠実に誓い，お悲しみを鎮めていただきたいと懇願し，「実際われわれギリシャ人にだって，トゥロイの人たちと同じように，喜んであなたに敬意を払うことが出来るんですよ」と言った上で，更に言葉をつづけました，

「あなたには初めての出来事なんだから無理もありませんが，きっと奇異の感にお打たれになるでしょうね，あなたがよくご存じのトゥロイの人たちを，あなたには見ず知らずのギリシャ人たちと交換するってことはね。だけど，われわれギリシャ人の中にも，トゥロイのどんな人にだって劣らないほど誠実で親切な人物が必ず見つかりますよ。ぼくは，さきほど，あなたの友人として全力を挙げてお役に立ちたいってお約束しましたし，あなたの全然ご存じないほかのギリシャ人の誰よりも，ぼくは，あなたにお近づきを得たわけです。ですからお願いするのですが，ぼくにとってどんなに苦しい事であっても，あなたのお望みになることなら，今後昼夜の別なく，ぼくにお申し付けになっていただきたいんです。そして，ぼくを兄として扱って下さって，ぼくの好意を軽蔑しないでいただきたいですね。あなたが重大な事のためにお悲しみになってるにしても，ぼくにはその理由が全然分らないんです。だけど，そのお悲しみを即座にお癒やしすることが出来るとすれば，ぼくにとって，これほど嬉しいことはありませんよ。万一ぼくの力では何とも始末がつかないようなご災難だとすれば，あなたのお悲しみに対して，ぼくは全くご同情に堪えません。

トゥロイの人たちは，われわれギリシャ人に対して，長い間憤りを感じて来られたかも知れませんが，全くのところ，われわれギリシャ人だって，やはりあなた方と同じ一つの恋の神に何時もお仕えしているんですよ。ねえ，美しいあなた，あなたが誰をお憎みになるにしても，後生ですから，ぼくに対してはご立腹なさらないでいただきたいですね，だって実際，あなたにお仕えする人で，あなたのお怒りを受けるに値いするってことを，ぼくくらい屑しとしない者は，絶対にいないんですからね。このことについては，ぼくの意中をすっかりお話ししたいんですよ，カルカスさんのいる天幕にこんなに近づいていなければね，だって，ぼくたち二人の姿が見えるかも知れませんからね。だけど，このことは

次の機会まで伏せておくことにしましょう。手を取らせて下さい，ぼくは現在ほかの誰も及ばないほど完全にあなたのものなのですし，全くのところ，今後も生涯永久に変らない積りなんですから。ぼくはこれまでどんな女性にもこんなことを言ったことはないんです，だって，断言しますが，ぼくはこれまで一度も熱烈に女性を愛したことがないんだし，これからも絶対にないでしょうからね。至らない男ですから，あなたに対して哀訴する術も知らないのですが，ねえ，あなた，後生です，ぼくの敵国人だってお考えをお捨て下さい。そして，ぼくがあなたに対して，こんなにそそくさと恋を告白したからって，変に思わないでいただきたいですね，だって，一度も会ったことのない女性に愛を感じた人も，ずいぶん沢山いるそうじゃありませんか，そんなことを聞きましたよ。恋の神に逆らう力など，ぼくにもありません，ぼくは何時もおとなしく恋の神に従うことにしてるんですよ。どうぞ，ぼくに同情して下さい。ギリシャ軍の中には，幾人も立派な騎士がいることですし，そこへあなたがこんなにお綺麗だと来てるんですから，きっと一人残らず，あなたのお気に入ろうと苦心することでしょうよ。だけど，もしぼくが，あなたに下僕（しもべ）と呼んでいただけるほどのご寵愛に預かる身になれるなら，ぼくは死ぬまで，ほかの誰も追っつかないくらい，謙虚誠実にあなたにお仕えする積りですよ。」

クリセイデは彼の語ることに対して殆んど答えなかったのでした，悲しみに心をひしがれて，実際，彼の言葉が耳に入らなかったのです。ただ，時々ひと言，ふた言耳に挟んで，悲しみに満ちた心が二つに裂けそうに思われ，遠くに父の姿を認めるや，危く馬から落ちそうになりました。けれども，ダイオメッドが骨を折ってくれたり，愛想よくしてくれたりすることや，喜んで好意を示してくれることに対しては，彼に感謝したのでした。快くご好意を受け容れ，お気に召すようなことを喜んで致しましょう，そして，極力あなたを信じることに致しましょう，このような意味のことを述べたのち，彼女は馬から下りました。父は彼女を両腕に抱いて幾度となくこの美しい娘に接吻し，「ああ，お前，よく来てくれたね」と繰り返しましたが，クリセイデもまた，お逢いできて嬉しいですわと述べたのち，黙っておだやかに行儀よく立ったままでいました。併しここでわたくしは，彼女を父のもとに残しておいて，トゥローイラスのことをお話しすることにしましょう。

不幸なトゥローイラスは，この上もなくはげしい悲しみに包まれ，腹立たしそうな様子，痛悲な面持でトゥロイに帰って来ましたが，突然馬から下り，胸も膨れる思いで王宮を通って自室に向いました。彼は何事にも心を留めず，また，誰も皆恐れてひと言すら敢えて彼に口を利こうとはしません。彼はそれまで抑えていた悲しみの情を思う存分ぶちまけて，死だ！　と叫びました。そして，狂気のように悶え苦しみながら，ジョーヴ，アポロ，キューピッドを呪い，⑤シーリーズ，バッカス，ヴィーナス，自分の生れたこと，自分自身，自分の運命，造物主，愛人を除く一切の造られたものを呪うのでした。ベッドにはいりましたけれども，地獄の⑥イクサイオンのように狂乱のうちに四転八倒し，殆んど夜明けまでそのような状態でいたのでした。けれどもやがて，湧き出る涙のために心も少

し鎮まり，いとも切なげにクリセイデに呼びかけながら独り言を言いました，

「愛するあの人はどこに居るんだろう？　あの人の白い胸はどこにあるんだろう，一体どこに？　ゆうべの今頃，ぼくの側にあったあの人の腕，あの人の澄んだ目，それはどこにあるんだろう？　いま，ぼくはただ一人で散々涙を流して泣きながら手探りしても，ここには枕以外には何も抱く物が見つからないのだ。どうすればいいのだろう？　あの人はいつまた戻って来るだろう？　ああ，どうしてあの人を行かせてしまったのだろう？　ああ，あの時死ねばよかったのに！　ああ，愛する人，クリセイデさん，ああ，憎らしい愛人！　ああ，ぼくのただ一人の愛人！　あなたにぼくは永久にぼくの心を与えるのだ。ぼくの死ぬ様子を見てくれ給え，あなたはぼくを助けてくれようとはしないのだ！

ぼくの北極星よ，今あなたを見ているのは誰だろう？　まさに今あなたの目の前に坐り，また，立っているのは誰だろう？　今あなたの心の乱れを鎮めることが出来るのは誰だろう？　ぼくが去ってしまった今，あなたは誰の言葉に耳を傾けるのだろう？　ぼくのいない今，誰がぼくに代って話をするのだろう？　ああ，誰もいないのだ，そして，ぼくが心配するのはまさにそのことなんだ！　だって，ぼくにはよく分るんだもの，あなたがぼくと同じように不幸なんだってことが。最初の夜からこんなに苦しいのに，まる十日間辛抱することが，どうしてぼくにできるだろう？　悲しみに沈んだあの人もまたどのようにするだろう？　ぼくのためにこんな不幸に堪えることが，どうして気の弱いあの人にできるだろう？　ああ，ここに帰って来ないうちに，あなたの生々した女らしい顔は苦悩のために，いたましくも青ざめてしまうだろう。」

うとうと眠りはじめるや，すぐさま彼は呻き声を上げて，世にも恐しい夢を見るのでした，それは，自分がただ一人恐しい所に居て，絶えず呻いている夢だの，敵軍の真直中に居て，彼等の手中に落ちた夢だのです。それと同時に体がびくっとして，その衝動で突然目が覚め，胸のあたりに戦慄を覚えて，その恐怖のために身震いするのでした。それと共に，叫び声を上げ，高い所から奈落の底に落ちるような気がするのでした。それから彼は涙を流していとも切なげに，わが身を歎き悲しむのでしたが，彼の妄想たるや，耳にするだに奇怪至極なものでありました。また別の時には，力強く自分を慰めながら，訳もなくこのような恐怖に悩むのは愚かしいことだと言ってみるものの，またしても新しくはげしい悲しみの感情が起って来るのでしたが，その悲しみには何びとも同情を禁じ得ないことでありましょう。彼の悲しみ，歎き，憂愁，苦悩を正確に語り，充分に述べることが，誰にできましょうか。古今を問わず，何びとにも不可能なことです。わたしの才能を以ってしてはこのような悲しみを明確に言い表わすことが出来ないということ，それは読者ご自身が篤とご推察になることでしょう。わたしは，そのような悲しみについて考えただけでも，ぐったりするのですから，述べようと骨を折ってみても，無駄に終るに相違ありません。

月は蒼白く薄れて来ましたが，空にはまだ星影が見られます。東の方の地平線がいつも

のとおり明るく白んで来て，その後すぐ，太陽が薔薇色の車に乗って昇る用意をはじめましたが，丁度その頃，トゥローイラスはパンダラスのもとに使者をやりました。かたく約束したにも拘らず，パンダラスはその前日ずっとトゥローイラスに会いに行く機会が得られなかったのでした，それは，一日中プライアム王と居を共にして，何処へも自由に行かれなかったためです。けれどもその翌朝には迎えを受けて，トゥローイラスのもとに赴きました，といいますのは，トゥローイラスが悲しみのために一晩中眠れなかったことが充分推察されましたし，また，トゥローイラスがその苦悩について自分に話したがっているのだということが，直観的に分ったからです。そこで彼はまっすぐにトゥローイラスの部屋に赴いて，畏まった挨拶をしたのち，直ぐさまベッドの上に腰を下しましたが，トゥローイラスが言いますには，

「パンダラス君，ぼくはもう悲しみに堪えられないんだ，明日まで生きられないと思うよ。だから，万一の場合の埋葬方法を，君に話しておきたいと思うんだ。ぼくの動産は最善と思われる方法で処分してくれ給え。それはそれとして，ぼくの遺骸を焼いて灰にすべき火葬の火のことだの，お通夜の時のご馳走や競技のことだのについては，滞りなく事が運ばれるようにご配慮願いたいんだ。ねえ，君，ぼくの馬だの剣だの兜だのはマーズに献上し，燦然たる楯はパラスに奉納してくれ給え。心臓が焼けた後の灰は，お願いだ，掻き集めた上で，黄金の器に，骨壺って言うんだね，あれに納めて，ぼくの仕えている愛人に渡してくれ給え，その人を愛する余り，ぼくはかくも哀れに死ななければならないんだ。そして，その灰を形見として，手許に置いてもらいたいってことを，君からあの人に頼んでもらえば，こんな嬉しいことはないね，なぜって，ぼくははっきり感じるんだよ，どうしても自分は死ぬんだってことがね，だって，病気でもあるんだし，また，死ぬ夢をずっと以前にも見たし，現在でも見るんだよ。それにまた，⑦アスカラファスって梟が二晩もつづけて啼くんだよ，ぼくに向ってさ。マーキュリーよ，悲しみに沈んだ哀れなぼくの魂を，いまお導き下さい，そして，お好きな時にお召し下さい！」

パンダラスは答えて言いました，

「親友のトゥローイラスさん，前にも申しましたとおり，理由もなくそんなにお歎きになるなんて，馬鹿げてるじゃありませんか。そのことについては，ぼくはもうこれ以上どう申し上げていいんだか分りませんね。だけど，誰にしろ，人の忠告にもお説教にも承服しようとしないような人は，妄想に耽らしておくより外には，処置なしですよ。だけどトゥローイラスさん，あなたと同じくらい熱烈に恋をした人もこれまでにあるんだってことをお信じになりませんか，どうでしょう，仰有って下さい。いや，ありますよ，たしかに。しかも，立派な騎士で，二週間も女性に置いとけぼりを喰らわされた人が沢山あるんですが，あなたの半分も騒ぎ立てなかったですね，誰も。あなたもそんなに煩悶なさることはないじゃありませんか，だって，自分の命のように思って愛しているのに，まさにその愛人なり妻なりとどうしても別れなければならないってような例なら，ご自身の目で毎

日ご覧になれるんですからね，しかも，その人があなたのように煩悶しないんだってこともね。ねえ，親友のトゥローイラスさん，あなたもよくご存じでしょう，仲好し同志だって，何時も一緒にいられるとは限りませんよ。よくあることなんですが，自分の愛人が，親類の者たちに無理矢理に結婚させられて，その夫君なる人とベッドを共にするのを知った人たち，この人たちはどうするでしょうか？明るい希望に心を支えられて，分別のある立派な穏かな解釈を下しますよ，きっと。この人たちは悲しみの期間に堪えることが出来ることから，時が彼等の心を傷つけるのと同じように，時が彼等の心を癒やすってことになるんですよ。だから，あなたもじっと堪え忍んで時を経過させた上で，晴やかな明るい気分になろうと努力なさるべきですね。十日間待つくらい何でもないじゃありませんか。クリセイデも帰るってことをあなたにお約束した以上，誰の為だからって，その約束を破るなんてことはありませんよ。命にかけて断言しますが，帰国の方法がつかないんじゃないかなんて，ご心配なさるには及びませんよ。

ご覧になった夢だの，それに類した色々な妄想だのは，すっかり追っ払って下さいよ，ぺしゃんこにしておしまいになることですよ，だって，そんなものはあなたのご憂鬱の所産なんで，その憂鬱って奴が，ご睡眠中に散々あなたのお心を苦しめるんですよ。夢なんて，すべて全く無意味なものですよ，そんなものは歯牙にもかけませんね，ぼくは。夢とは何ぞやってことを，正当に理解してる人は一人もいませんよ。寺院の僧侶たちは，夢は神の啓示だだの，地獄の幻影だだのって言いますし，医者に言わせれば，夢は体質だの，断食だの，大食だののせいだってことになるようです。全くのところ，このように夢の正体は誰にも分らないんですよ。人がある事柄をしっかり心に懐いている場合に起るって具合に，夢想は感銘に由来するのだ，こういうように言う人たちもいれば，また，書物に見えるところに従ってこういう説をなす人たちもいますね，つまり，元来人間の見る夢は，季節によって異なるものなので，それは月の影響によるのだって言うんですよ。だけど，夢などお信じになっちゃ駄目ですよ，当てにならないものなんですから。夢などは老婆の有難がるものなんだし，実際，鳥による占いまた然りですよ，つまり，鴉の不吉な啼声だの，梟の叫び声だののたぐいですね，その占いで，自分は死ぬんじゃあるまいかって恐怖心を起こす人もあるわけなんですがね。そんなことを信じるのは迷妄邪悪なりと言うべきですよ。ああ，霊長たる人間がこんな他愛もないことを恐れるなんて！

ですから，後生一生のお願いです，そんなにくよくよなさることはすっぱりおよしになって下さい，そして，もうこれ以上何も仰有らないで，すぐお起きになって下さい。差当りどのように時を過ごすのが一番いいだろうかってことだの，間もなく実現することでしょうが，クリセイデが帰って来た時，われわれはどうすれば毎日を元気に過ごすことが出来るだろうかってこと，そういったことを二人で研究してみようじゃありませんか，それが一番いいですよ，たしかに。さあ，お立ち下さい，われわれがトゥロイで送った愉快な生活の話をして，時を過ごそうじゃありませんか，そしてまた，程なくわれわれに幸福を

もたらすに違いないのですが，その来るべき時を楽しみにしながら，この十日間の憂鬱を忘れるか，押えつけるかして，その憂鬱から来る苦痛を殆んど感じなくなるようにしようじゃありませんか。この町には至るところに貴族の人たちが居るんですし，ここ暫く休戦状態がつづいてもいるんですから，ここから一哩そこそこの所に居られる⑧サーペドンさんを訪問して，愉快な連中と一緒にはしゃごうじゃありませんか，そうすればご気分が紛れて，お悲しみの原因たるクリセイデとお逢いになれるご幸福な日の朝まで，時を消すことがお出来になれるでしょうからね。

さあ，お起き下さい，親愛なトゥローイラスさん，泣きべそを掻いて，ベッドの中でうつらうつらしてらっしゃるなんて，たしかに，あなたのご名誉にはなりませんよ。実際，これだけはぼくの言うことを信じていただきたいですね，それは，一日，二日，三日と，こんな状態で寝そべってらっしゃれば，あなたが臆病風を吹かして，仮病を使ってらっしゃるんだ，そのためにお起きになれないんだって風に，世間の人たちが取るだろうってことなんですよ。」

トゥローイラスは答えました，

「ああ，親愛なパンダラス君，苦痛を味わったことのある人になら分ってもらえると思うんだ，血管って血管が，ずきずき痛むような気がする者が，泣いたり悲しそうな顔をしたりするからって，不思議でも何でもないんだってことがね。だから，ぼくが歎きつづけたり，泣きつづけたりするからって，責められる筈はないと思うよ，だって，ぼくはいま，喜びの原因をすっかり無くしてしまったんだからね。だけど，どうしても起きなきゃならないようだから起きるよ，できるだけ急いで。

わが心を捧げまつる神よ，十日目の日を大急ぎでわたくしたちにお授け下さい！　なぜなら，わたくしの苦しみの源でもあり，喜びの源でもあるあの人が，トゥロイに帰って来た時，五月を迎えてわたくしの心は，嘗て如何なる鳥も味わったことがない程の喜びに溢れることでしょうから。

だけど，ぼくたちがトゥロイの町中で一番歓を尽くし得べき場所は，何処にしてくれる積りなの？」

「そのことなんですが，サーペドン王の所に行って楽しもうって計画なんですよ。」

そのことについて長い間あれこれと話し合った末，やっとトゥローイラスは起き上ることに同意し，二人はサーペドンの所に赴きました。このサーペドンという人物は，その生涯を通じて，立派な，極めて気持ちのよい人でしたから，いくら費用がかさんでもお構いなしに，およそ食卓に並べ得るかぎりのご馳走を，毎日二人に振舞ったのですが，すべての人が口を揃えて言うところによれば，そのような素晴らしいご馳走は，これまで如何なる饗宴の席でも知られなかったとのことです。吹奏の楽器であれ，絃楽の楽器であれ，およそ人が口に出して言うことができる楽器，思い出すことの出来るほどの楽器なら，人の足跡の及んだかぎりの全世界の楽器が一つ残らず，この席でいともいみじく奏せられるの

が聞かれたのでした。そしてまた，かくも美しい婦人の一群が踊る光景は，未だ嘗て見られたことがなかったのでした。

けれども，悲しみのために心を留めようとしないトゥローイラスにとって，このような
450
ことが何の役に立ちましょうか，といいますのは，終始変らず彼のあわれな心は，しきりに愛人のクリセイデを求めていたからです。あれこれと頻りに想像しながら，絶えず彼女のことばかり思いつめ，如何なる饗宴も彼の心を喜ばすことは出来なかったのでした。愛人の立ち去ったことを知る現在，この饗宴の席にある婦人たちを眺めることも，楽器の奏せられるのを聞くことも，彼にとって悲しいことでありました。自分の心の鍵を握ってい
460
るあの人が居ないのだから，音楽を奏するなど，以ての外だと思われるのでした。「ああ，可愛らしい美しい人よ，ここを去ってから，どのようにしているの？　早く帰ってくれないか，愛するあなた！」誰にも聞かれない所にいる時には，昼夜の別なく，ただの一時間でさえ，彼がこのように言わないことはなかったのでした。けれども悲しいかな，心が乱れるばかりです。運命の女神は，ますます彼を嘲弄しようと考えていたのでした。

以前にクリセイデのよこした手紙を，午前中にただ一人で何度も繰り返して読みなが
470
ら，彼女の姿だの，女らしさだの，今は過ぎ去った彼女の言葉や動作だのを，彼は心の中に思い浮べるのでした。このようにして第四日目を終えるや，そろそろ出かけたいと言い出しながら，彼は言葉をつづけました，

「ねえ，親愛なパンダラス君，ぼくたちがサーペドンさんから帰れって言われるまでここに居坐ることにしようってわけなのかい，君の積りは？　こちらからお暇する方が礼儀
480
じゃないかね。ねえ，早速だ，夕方には失礼して帰ろうじゃないか，だって，実際，こんなに何時までもお邪魔していたかないんだよ，ぼくは。」

パンダラスが答えて言いますには，

「ぼくたちがここに来たのは，一寸火を借りて，あたふた家に取って返すって風な，そんな積りだったのでしょうか？正直な話，ぼくには見当がつきませんね，一体全体何処の誰が，サーペドンさん以上に，ぼくたちを歓迎してくれるだろうかってことが。それに，一週間お世話になりますって言ったんですから，そんなに突然そそくさお暇するのは，
490
失礼だと思いますね。四日目の今，だしぬけに失礼しますなんて言い出せば，きっと変に取られますよ，サーペドンさんに。どこまでも予定を変えないことにしようじゃありませんか。あなたもお世話になりますってお約束になった以上，そのお約束をお守りにならなくっちゃ。その上で，お暇することにしましょうよ。」

パンダラスはこのように苦心惨怛の末，やっとトゥローイラスを留らせることが出来たのでした。そして一週間が終るや，二人はサーペドンに別れを告げて，大急ぎで帰路につ
500
きました。「神様，お恵みをお垂れ下さい，家に戻れば，クリセイデさんが帰って来ていますように！」このように祈ってのち，トゥローイラスは歌い出すのでしたが，パンダラスは，「怪しいものだ」と考えながら，「実際，カルカスがクリセイデをトゥローイラス

さんの所に送り返して来るまでに，このはげしい興奮が鎮まればいいんだがな」と，小声で独り言を言いました。ともあれ，彼は冗談を言ってみたり，ふざけてみたり，ぼくは確信するんですが，クリセイデは出来るだけ早く帰って来ますよ，と請合ってみたりするのでした。トゥローイラスの邸に着くや，二人は馬から下りて彼の部屋に向い，夜になるまで，美しいクリセイデについて語り合いましたが，その後気の向くままに，大急ぎで夕食をとって，寝に就きました。

その翌朝，トゥローイラスは夜が明けそめるや否や目を覚まし，親しい兄弟とも言うべきパンダラスに向って，いとも悲しげに言いました，「ぜひ出かけることにしようよ，クリセイデさんの邸を見にさ。だって，外に楽しみがないんだから，せめてあの人の邸でも見ようじゃないかってわけだよ。」そこで，家人をごまかさんものと，町に出かける口実を見つけた上で，二人はクリセイデの邸に赴きました。けれども，ああ，あわれなトゥローイラスは如何ばかり悲しかったことでしょう！　悲しみに満ちた心が二つに裂けるような気がしました，といいますのは，彼女の邸の戸が，どれもこれも全部とざされているのを見て，彼は悲しみのあまり倒れそうになったからです。そしてまた，窓という窓がすっかり締っているのに気がついて，心が霜のように冷たくなるように思われました。かくて，顔は死人のように真青になり，彼は物も言わずに邸の側を通り過ぎました。実際，大急ぎで馬を進めましたので，誰にも顔を見られなかったのでした。その時彼が言いますには，

「ああ，淋しい邸だ！　ああ，嘗てはこんなすばらしい家は無いって言われたのに，今はがらんとして，なんてわびしい邸なんだろう！　ああ，明かりの消えてしまった門燈！　ああ，嘗ては昼だったのに，今は夜とも称すべき邸よ，お前は崩れ落ちてしまわなければならないんだ，そして，ぼくは死ななければならないんだ，だって，いつもぼくたちを案内してくれたあの人が居なくなってしまったんだから。ああ，嘗てはあらゆる幸福の日の光に照らされて，すべての家の冠とも言うべき家だったのに！　ああ，ルビーの抜け落ちた指環のようだ！　ああ，嘗ては慰めの源だったのに，今では悲しみの源なんだ！　だけど，大勢の人の目を憚らないでやれるなら，ぼくはお前の冷たいドアーに接吻したいのだ，そうするより仕方がないんだから。ご本尊のなくなった社よ，さようなら！」

このように言って，彼はパンダラスの方に目を向けましたが，顔色も変り果てて，見るからにあわれでありました。そして，馬を進めているうちに，適当な折を見つけて，今の悲しみや，昔の喜びをパンダラスに語るのでしたが，その様子はまことにあわれで，顔色は死人のようです，彼の悲しみには，何びとも同情を禁じ得なかったことでしょう。それから彼はあちらこちらに馬を進めましたが，嘗て歓びを尽くした町のここかしこを通り過ぎる度毎に，あらゆる思出が蘇って来るのでした，

「ああ，あそこであの人が踊るのを最後に見たんだ。あの社で愛するあの人が，きれいな目で初めてぼくをとらえたのだ。あそこで，ぼくは愛するあの人がとても楽しそうに笑

う声を聞いたんだ。そしてまた，向うで，あの人がとても幸福そうに遊びたわむれるのを見たことがあるんだ。ねえ，わたくしをお愛し下さいませ，あそこであの人がそう言ったことがあったっけ。向うで，あの人がぼくを見つめたんだが，生涯ぼくの心があの人に結びつけられるくらい，その目はすばらしかったんだ。あの角のあそこの家で，最愛のあの人がいい声で歌うのを聞いたんだが，とても女らしくて，声がよくて，上手で，品がよくて，声が澄んでいたものだから，楽しそうなその声が，今まだぼくの心の中で聞えるような気がするのだ。向うのあの場所で，あの人が初めてぼくに好意を示してくれたのだ。」

それから彼はこのように考えました，

「ああ，聖なる神キューピッドよ，あなたが事毎にぼくに対して挑戦なさったこれまでの経緯（いきさつ）を思い返してみるなら，一篇のストーリーのように本が一冊出来上りそうですよ。あなたは何の必要があって，ぼくに対して勝ち誇ろうとなさるのですか，ぼくは完全にあなたのものであり，全く御意（ぎょい）のままになるじゃありませんか，ご自身の信徒を破滅させて何が嬉しいのですか。お怒りに触れることの恐しい，力強い神よ，あなたは，ぼくに対して，何とはげしい怒りをお洩らしになったことでしょう！　今ぼくにご慈悲をお垂れ下さい！　あなたはよくご存じじゃありませんか，ぼくが如何なる喜びにもまして，あなたのご慈悲を望み，あなたの信仰に生き且つ死ぬんだってことを。それに対する報酬として，ぼくのお願いするのは，直ぐぼくにクリセイデさんをお返しいただくよう，お恵みをお垂れ下さいということだけなのです。ぼくの心を駆り立てて，あの人に会うことを熱望させ給うのと同じくらい，矢のような帰心をあの人に起こさせて下さい，そうすれば，きっとあの人は，あちらに留っていようとはしない筈です。聖なる神よ，お願いです，トゥロイ人たるぼくに対して，残忍な振舞をなさるのはよして下さい，ジューノーの女神がテーベの種族に対して残忍だったように。ジューノーの仕打ちでテーベの種族は滅んだじゃありませんか。」

それから彼は，クリセイデが出て行った門のところに大急ぎで馬を飛ばし，そこらあたりを幾度となくぐるぐる廻りながら，何度も独り言を言うのでした，

「ああ，ここから出て行ったのだ，ぼくの喜び，ぼくの慰めが！　聖なる神よ，あの人が再びトゥロイに帰って来る姿が見られるよう，何卒お恵みをお垂れ下さい。ああ，あの向うの岡まで，ぼくはあの人を案内して行って，あそこであの人と別れたのだ！　この先のあそこで，あの人が父の方へ馬を進めるのを眺めたのだ。そのことを思い出すと，悲しくて心臓が裂けそうだ。あの時夕方になってぼくはここに戻って来たのだ。そして，すべての喜びを奪われて，今ここに立ち尽くしているのだ，いや，あの人とトゥロイの町で会えるまで，ここに居ることにしよう。」

彼は自分が衰弱し，青ざめ，以前よりも痩せたように感じることが何度もありましたし，また，人びとがひそひそ噂をしているように思われることも度々ありました，一体どうしたって言うんだろう？　なぜトゥローイラスさんがとても憂鬱そうなんだか，本当の

ところが誰にも分らないんだ，こんな噂をしているような気がするのでした。彼が自分についてこのように想像するのは，ひとえに彼の暗い気持のためでありました。また別の時には，道を通る人たちが皆自分に同情してくれて，お気の毒だが，トゥローイラスさんもやがて亡くなられるだろう，と言っているように思われるのでした。今お話ししたような状態で，彼は一日，二日を過ごしましたが，まさに，希望と恐怖の間に立っているような生活を送ったのでした。そこで彼は，悲しみの原因を出来るだけはっきり，歌の中で言い表わしたいものだと思い，悲しい心を幾分でも和げるために，短い歌を作りました。そして，誰にも見られない時には，居ない愛人について低い声で次のように歌うのでした。

トゥローイラスの歌

ああ，ぼくがその光をすっかり見失ってしまった星よ，
傷心をいだいて，ぼくが歎くのも当然じゃないか，
だって，ぼくは毎夜真っ暗な苦悩につつまれ，
追風を受けて，死へと舟を進めるのだもの。
だから，ぼくが十日目の夜にただ一時間でさえ，
あなたの輝かしい光の導きを得ることが出来ないなら，
ぼくは舟もろとも ⑨カリブディスに呑まれてしまうだろう。

この歌を歌い終るや，すぐさま彼は元の溜息にかえるのでした。そして，毎夜きまって，皎々たる月を眺めて立ち，自分の悲しみの一切を月に向って語るのでした，

「お前がまた角形の新月にかえる頃，きっと，ぼくは幸福になっているだろう，この世の中全体が誠実なら。ぼくの苦しみ，ぼくの悲しみの原因たる愛するあの人が，ここから立ち去った朝にも，ぼくはお前のこの前の角形の姿を眺めたのだ。だから，ああ，輝かしい清らかな ⑩ルーサイナよ，後生だから，お前の軌道を大急ぎで走っておくれ，だって，お前の新しい角が生えはじめる頃に，ぼくの幸福をもたらすあの人が帰って来るんだから。」

いつもより日数が多くて，夜が長いように思われ，また，太陽がその軌道を間違えて，何時もより遠廻りしているように思われ．彼はこう呟くのでした，

「ほんとうに心配だな，太陽の息子の ⑪フェーエソンがまだ生きていて，父の車を間違った方向に駆ってるんじゃないだろうか。」

彼はまた，堅固な城壁の上を歩んで，ギリシャ軍の方を眺めながら，独り言を言うのでした，

「そうだ，あのあたりに，ぼくの美しい愛人がいるのだ，それとも，向うの天幕の張ってある所かも知れない，そして，そこからこの気持のいいその風が吹いて来るんだろう，ぼくを癒やしてくれるような気がするよ，心からしみじみ。刻々強くなって顔に吹きつけるこの風は，きっとあの人の深いはげしい溜息から起るんだ，きっとそうだと思うよ，だって，こんなに歎くような音を立てる風の吹く所は，町中何処にもないんだもの，ここ以外には。ああ，わたしたち二人は，なぜ別れているのでしょう？　そう言ってるんだ，こ

の風は。」

九日目の夜が終るまで，彼はこのようにして長い時間を過ごしましたが，彼の側には絶えずパンダラスが付き添っていて，十日目の朝にはクリセイデが帰って来て，悲しみを無くしてくれるだろうという期待を彼に与えながら，彼を慰めてその気分を軽くしようと，懸命に全力を尽くすのでした。

他方，クリセイデは数人の婦人たちと一緒に，強大なギリシャ軍の中にいましたが，そのため，日に幾度となく歎くのでした，

「ああ，なんて悲しいことなんだろう！　死にたくって仕方がないわたしの気持，だけど，それが当り前なんだわ，わたし長く生き過ぎたんだもの。ああ，この気持をどうすることも出来ないわ，だって，前に考えていた以上に，困ったことになったのだもの。父はどうしても帰国を許してくれようとはしないんだけれど，父のご機嫌が取れそうにもないわ，全然。万一，お約束の期限が来ても帰れなければ，トゥローイラス様はきっとお心の中で，わたしを不誠実な女だってお思いになるだろうけれど，そう見えるのが当り前だわ。そして，そんなことになったって，誰に感謝されるわけでもないんだわ。ああ嫌だ，なんて悲しいことなんだろう！　危険を冒して，夜中にそっと抜け出してみても，万一つかまれば，スパイだって思われるだろうし，また，これが一等恐しいことなんだけれど，もし卑劣な男の毒牙にかかれば，何もかもおしまいだわ，いくら心は純潔でも。ああ，全能の神様，わたくしの悲しみにご慈悲をお垂れ下さいませ！」

出来るときには一日中立ち尽くして，自分が生れて住みなれて来た場所を眺めやるクリセイデ，かくて，嘗ては晴やかだったその顔は全く青ざめ，手足も痩せ細ってしまいました。夜は夜とて，あわれにも一晩中，泣きながら身を横たえるのでした。このようにして，不幸な彼女は心を癒やす術（すべ）とてなく，絶望のうちに日を送りました。彼女はまた，一日に幾度となく，苦悩のあまり溜息をつき，トゥローイラスのすばらしさを絶えず心に画きつづけ，また，はじめて恋心が芽生えた日以来の彼のやさしい言葉の数々を思い出すのでした。かくて彼女は，かくあれかしと望むことどもを胸に思い浮べながら，悲しい心を燃え立たせたのです。彼女が悲しみのあまり歎くのを聞き，しかも，そのはげしい苦悩に同情して涙を流さないほど心の冷たい人，そのような人はこの広い世の中に一人もいないことでしょう，それほどまでも切なげに，彼女は朝な夕な泣き咽ぶのでした。彼女には人の涙を借りる必要などなかったのです！　そして，彼女にとって一番辛いことは，自分の悲しみを敢えて訴えるべき人が一人もいないということなのでした。彼女は悲しそうにトゥロイの町の方向を望み，高い塔や広間を眺めながら言うのでした，

「ああ，今はすっかり悲しみに変ってしまった楽しみと喜び，その楽しみ，その喜びを，向うのあの城壁の中で何度も味わったんだわ。ああ，トゥローイラス様，いま何をなさってますの？　ほんとうに，まだクリセイデのことを，お考えになっていて下さいまして？　ああ，なぜあなたのご忠告を信じて，仰有るとおりにご一緒に逃げなかったのかし

ら？　そうしていれば，今こんなにはげしく溜息をつかなくて済んでるだろうに。トゥロー
740
ーイラス様のような方と逃げたからって，まあ馬鹿なことをって，誰が言っただろう。だけど，薬なんてものはいつも，死体がお墓に運ばれる段になって，やっと届くものだわ。いまさら愚痴をこぼしてみたって，始まらないんだわ。ああ，思慮よ，お前の三つの眼のうちの一つが，わたしには欠けていたんだわ，わたしがここに来るまでに。過去のことはよく覚えていたのだし，現在のこともよく分っていたのだけれど，未来のことを見る眼がなかったのだわ，罠にかかるまでは。だからこそ，今こうして悲しまなければならないんだわ。

とにかく，どんなことがあっても明日の晩には，東側か西側か，どの側からか，この軍
750
隊を抜け出して，トゥローイラス様のお好きな所へ，あの方とご一緒に行くことだわ。この決心を変えないことにしよう，そうするのが一等いいんだわ。口の悪い人たちが噂を立ててても，問題じゃないわ，だって，お定まりなんだもの，卑劣な人たちが他人の恋愛を嫉
や
くってことは。人の言うことを一々気にしたり，人の意見で一々ぐらついたりしていたのでは，うまく行きっこないわ，たしかに。だって，同じ一つの事を悪く言う人もあれば，
760
褒める人もあるんだもの。まちまちの意見など気にしないで，自分の満足のゆくようにすれば，それが幸福なんだわ，わたしとしては。だから，もうこれ以上かれこれ言わないで，トゥロイに行くことだわ。決めたわ，そうと。」

けれども，実際のところ，まる二ケ月とたたないうちに，彼女はこの決心から全く遠ざかってしまったのでした，といいますのは，やがてトゥローイラスもトゥロイの町も，結び目のない糸のように，するすると彼女の心から抜け出てしまい，クリセイデはギリシャ
770
に留まろうと決心することになるからです。さきにお話ししたダイオメッドは，クリセイデの心を網に捕えるべき最上策，最捷径や如何にと，今や全奸智，全能力を傾けて，心中しきりに画策していましたが，どうしてもこの意図を捨てることが出来ないで，彼女を捕えんものと，鉤針の付いた糸を繰り出しました。もっとも彼は，クリセイデがトゥロイに愛人を持っていない筈はないと，ひそかに確信してはいたのです，といいますのは，彼女
780
をトゥロイから連れて来て以来，彼女が笑ったり喜んだりするのを，一度も見ることが出来なかったからです。どうすれば一番うまく彼女の機嫌を取ることが出来るだろうか，それが彼には分らなかったのですが，「とにかく当ってみて損にはならないだろう，虎穴に入らずんば虎児を得ずだ」と呟くのでした。彼はまた，ある夜このように独り言を言いました，

「あの女がほかの男に対する恋のために悩んでいることを百も承知の上で誘惑を試みるなんて，馬鹿じゃないだろうか，ぼくは？　得には ならないってことがよく分ってるんだ，だって，賢人も書物に言ってるじゃないか，悲しみに沈む者に対して，求愛するを得
790
ずってことを。とにかく，あの女が日夜悶々と恋い焦がれている男の手から花を奪い取り得る者こそ，自らを勝利者と称して可なりだ。」

日頃から心臓の強い男のこととて，彼はそのすぐ後で，心中ひそかにこう考えました，「どんなことが起るにしろ，あの女の心を追求してみよう，ぼくの命がなくなったって構うものか。損をしたところで，喋り損になるくらいなものだ。」

このダイオメッドという人物は，書物の伝えるところによれば，いざという時に臨んで機敏勇敢であり，厳然たる声と角張った大きな手足を持ち，父の⑫タイデュースに似て，大胆，強情，強壮，行動は勇武であり，また，多弁であったと言う人もあります。そして，彼は⑬カリトンと⑭アーゴスの支配権を継ぐべき人でありました。

クリセイデは身の丈高からず低からず，姿，顔立ち，物腰の点で，彼女に勝る女性はいないだろうと思われます。背中の，頸飾のあたりで艶々した頭髪を束ね，それを金糸で結んでいるというのが，よく見かけられる彼女の習慣でありました。わたしの知り得るかぎりでは，両方の眉が続きそうになっているということ以外には，彼女にはどこにも欠点がなかったようです。彼女の澄みきった眼について申しますと，実際，その眼の中に天国が形づくられているようだと，彼女を見た人は書いています。そして，その胸の内の愛情は，彼女の豊かな美しさと常に優劣を競っているかのようでありました。落着いていて，純真で，加うるに，賢明であり，最上の教養を身につけ，言葉遣いは既して上品で，憐み深く，威厳があり，快活で寛大でありました。いつも同情心を失うことなく，優しい気立てでありましたが，少し移り気なところはありました。ただ，彼女の年齢は全くのところわたしには分りません。

トゥローイラスは充分な上背があって，造物主もこれ以上どうにもならなかった程，均勢のとれた姿態をしており，若くて，生気溢れ，強壮で，獅子のように精悍でありました。その資質鋼鉄のように誠実で，かくも資性のすぐれた人物は，現在はもとより，将来も永久に現われないことでありましょう。騎士として為すべきことを敢えて為す勇気の点で，トゥローイラスが同時代の何びとにも決してひけを取らなかったことは，歴史上紛れもない事実です。巨人に劣らないほどの腕力を持っていたとは言えませんが，己の欲するところを敢えて行う意気の点では，最上の類に伍する人物でありました。

それはともかくとして，ダイオメッドのことを引きつづいてお話しすることにしましょう。クリセイデがトゥロイの町からやって来た時から十日目の日に，五月の木の枝のように発溂としたダイオメッドは，たまたま，カルカスの陣営にやって来て，カルカスに何か用事があるような振りをしました。彼の本心については，すぐ後でお話しすることに致します。手短かに申しますと，クリセイデはようこそと挨拶して，彼を自分の側に腰かけさせ，彼は難なく長座させられることになりました。その後間もなく，薬味と酒が運ばれて来て，二人は友達のように，あれこれと語り合いましたが，その一端をお話し致しましょう。彼はまず最初に，ギリシャとトゥロイとの間の戦争の話をはじめ，町の包囲についての意見を聞かせていただきたいとクリセイデに頼みましたが，次いで話題を転じて，ギリシャの風俗習慣が奇異に感じられることはないかということだの，彼女の父がなぜ何時ま

でも彼女を然るべき人と結婚させないでいるのかということだのを尋ねるのでした。自分の騎士たるトゥローイラスに対する恋情のために，はげしく思い悩んでいるクリセイデは，及ぶかぎりの返答はしたものの，ダイオメッドの言葉の真意を計り兼ねる様子でありました。ともあれ，ダイオメッドは心中ひそかに自信を得て言葉をつづけました，

「ぼくの観察にして誤りなければ，こう思われるんですよ，それはですね，クリセイデさん，あの朝あなたがトゥロイをおたちになる時に，ぼくがあなたの馬の手綱にはじめて手をかけて以来，いつ見ても，あなたが悲しそうな顔をしてらっしゃるってことなんですよ。ぼくには原因が分らないんです，誰かトゥロイの人のことでも想ってらっしゃるんじゃないだろうかってこと以外にはね。もしそうだとすれば，トゥロイに住んでいる人のために，あなたが1クォーターも涙を流したり，そんなにお気の毒なほど血迷ったりなさるのが，残念でたまりませんよ，だって，全くつまらないじゃありませんか，そんなこと。ご存じのとおり，トゥロイの人たちは一人残らず，言わば牢獄に繋がれているようなもので，この世のありとあらゆる黄金を積んだって，そこから生きて遁れ出られる者は，一人もいないでしょうよ。いいですか，お分りですね，ただの一人だって，許されて命を全うすることは出来ないでしょうよ，十の世界を支配する王様でもね。われわれの息の根のとまらない限り，ヘレンさんを奪ったことに対する報復の鉄鎚が，トゥロイの人たちに加えられるでしょうよ。苛責の神たる地獄の神々でさえ，自分たちもギリシャ軍にやられはしないだろうかって慄え上るような報復がね。いやしくも王后ともあろう人を奪うことの恐しさを，将来世界の果ての人びとにまで思い知らせるくらい悲惨な様相を呈しますよ，その報復は。例のカルカスさんが曖昧な言葉で，つまり，二つの顔を持つ言葉って呼ばれる，どちらとも取られるような狡猾な言葉で，われわれを戸惑いさせない限り，ぼくが法螺を吹いてるんじゃないってことは，いずれあなたにも充分お分りいただけることになるでしょうし，また，ぼくの言ったことはみんなご自身の眼で，しかもお信じになれないくらい早い時期に，ご覧になることになるでしょうよ。油断なさらないように，きっとそうなるんですから。

ねえ，どうでしょう，賢明なあなたのお父さんがですね，トゥロイの滅亡すべきことをご存じなかったとしてもなお且つ，アンティーナーさんをすぐあなたと交換なさったでしょうか，そうお思いになりますか，あなたは？　とんでもないことですよ，たしかに。トゥロイ人たる以上，ただの一人さえ遁れることが出来ないことを，あなたのお父さんはよくご存じだったんですよ。そして，そのことが恐しくてたまらないからこそ，これ以上あなたをあの町に住まわせておくことがお出来にならなかったんですよ。美しいクリセイデさん，これ以上何が望みだって仰有るんですか？　トゥロイの町も人も，きれいさっぱりお忘れになることですよ。悲しい希望は吹っ飛ばしてしまって，元気をお出しになることですよ，そして，塩からい涙でよごれた顔に美しさを取りもどして下さいよ。だって，トゥロイの町は今や絶対の危機に瀕していて，今や救うにも全く処置なしって状態なんです

からね。よくお考え下さい，日の暮れないうちにギリシャ人の中で，どんなトゥロイ人よりももっと完全な，もっと親切な，一層よくあなたにお仕えしようと努力するっていうような，そういう風な愛人がきっと見つかりますよ。美しいクリセイデさん，もしお許しがいただけるなら，ぼく自身があなたにお仕えする身になりたいんですよ，十二のギリシャの支配者になるより，その方を望みますね，ぼくは。」

こう言いながら彼は真赤になり，声は少し震えました。顔をちょっと脇に逸らして暫く沈黙していましたが，間もなく気を取り直して，真剣な面持でクリセイデを眺めながら言うのでした，

「こんなことを申し上げても，喜んではいただけないでしょうが，ぼくはトゥロイのどんな人にも劣らないくらいの身分なんです，といいますのは，父のタイデュースが今少し長く生きてくれていたなら，クリセイデさん，ぼくはとっくにカリドンとアーゴスの王になっていたでしょうからね。いや，今からだって，そのことは期待できますよ，たしかに。ところが，まことに不運なことなんですが，父は不幸にもテーベで余りにも早く殺されてしまって，この父の落命は⑮ポリナイシーズさんやそのほか沢山な人たちに惨禍を及ぼすことになったのです。それはともかくとして，クリセイデさん，あなたこそ，ぼくが好意を求める最初の女性なんですが，ぼくはあなたの下僕（しもべ）として，真心を傾け尽くしてあなたにお仕えする積りでいるんです，そしてまた，命のつづく限り，変らない覚悟なんです。だから，今お別れする前にお許しいただきたいんですが，明日もっとゆっくり，ぼくの苦衷をお話しさせて下さいませんか。」

彼の言った言葉の数々を，今ここでお伝えする必要があるでしょうか？　たかだか丸一日ではありましたが，存分お喋りしましたので，その結果クリセイデは，彼の頼みに応じて，彼が恋愛のことに触れようとしないのなら，あくる朝彼と言葉を交わすくらいのことはしてもいいという許しを与えることになりました。何びとも引き離すことが出来ない程しっかり，その心がトゥローイラスの上に置かれていることとて，彼女は次のようにダイオメッドに言ったものの，よそよそしい話し振りです。

〔注　解〕

巻　の　五

① 運命の三女神はジョーヴに従属するものと考えられた。

② クローソー，ラケシス，アトゥロポスの運命の三女神，巻の四の注㉕参照。

③ 前掲注②参照。

④ ギリシャにおけるアキリーズに次ぐ勇士，巻の四の注①参照。

⑤ 穀物の女神。

⑥ テッサリヤのラピシー（Lapithae）族の王。ジュースの妻ヒーラ（Hera）を恋した罰として，ジュースによって永遠に回転する火の車に繋がれた。

⑦ 黄泉の国のアケロン（Acheron）川の息子で，黄泉の国の女王パセフォニー（Persephone）にフレゲソン（Phlegethon）川の水を頭から浴せられて，梟に姿を変えられた。

⑧ 巻の四の第五二行にも出た名前であるが，小アジアの南西部の古代国家であるリシア（Lycia）の王。

⑨ イタリー半島とシシリー島との間のメッシナ（Messina）海峡にある渦流で，元来同名の貪欲な女がジュピターによって渦流に姿を変えられたもの。

⑩ 出産を司るローマの女神。

⑪ 日神ヒーリオス（Helios）の息子。一日だけ父に許されて日輪の車を駆ったが，馬を御すること拙く，車が地球に近づき過ぎて，地球が燃えそうになったので，ジュースは雷を起して彼を殺し，エリダナス（Eridanus）川に投げ込んだ。

⑫ タイデュースについては後述の注㉕参照。

⑬ ギリシャ西部の古都。

⑭ ギリシャ南東部の古都。

⑮ ポリナイシーズについては後述注㉕参照。